人類の鉄鎖としての学問・文学・芸術（文化＝文明）批判

ルソー（Jean-Jacques Rousseau 1712-1779）の「学問芸術論」（Discours sur les Sciences et les Arts 1750）より抜粋（前川貞次郎訳　岩波文庫版）

1750 年度のディジョン・アカデミーの懸賞論文「学問と芸術の復興は、習俗の純化に寄与したか、どうか、について」の優勝作品

「人間の精神は、肉体と同じょうに、それ自身の欲求を持っています。肉体の欲求が社会の基礎であり、精神の欲求は社会の娯しみの基礎です。攻府や諸法律が、人間集団の安全と幸福とに応じるのに対して、**学問、文学、芸術は、攻府や法律ほど専制的ではありませんが、おそらく一層強力に、人間を縛っている鉄鎖を花環でかざり、人生の目的と思われる人間の生まれながらの自由の感情をおしころし、人間に隷従状態を好ませるようにし、いわゆる文化人を作りあげました。**欲求が玉座をたかめ、学間と芸術とがそれを堅固なものにしました。地上の権力者たちよ、もろもろの才能を愛し、才能をつちかうひとびとを保護するがよい。文化人たちよ、才能をつちかいなさい。幸福な奴隷たちよ、お前たちが誇りとしている繊細で巧緻な趣味、お前たちのあいだの交際をきわめてたやすく気持のよいものにしているあのおだやかな性格とみやびやかな習俗、要するに、なに一つ徳をもたないのにあらゆる徳があるかのようなみせかけ、これらはみな才能の力に負うものなのだ。」（14-15）

「君主たちは、貨幣の流出をきたさないような、ここちよい芸術と贅沢の趣味とが、臣民のあいだにひろがるのを、つねによろこびの目で眺めています。なぜなら、君主たちは、このようにして臣民を、隷従にきわめてふさわしい、あのちっぽけな魂の中で育てるだけでなく、人民がふける欲求が、それだけ人民を縛りつける鉄鎖となることを、よく知っているからです。アレクサンドロス（大王）は、魚食民族をながく自分に依存させておこうと思って、彼らに、漁業をすてて、他の民族と同じ食物で生きてゆくことを強制しました。裸で生活し、自分たちの狩の獲物だけで生きているアメリカの未開人たちは、ついに懐柔されることはありませんでした。実際、なに一つ欲求をもたないひとびとに、どんな桎梏を加えることができるでしょうか。」（ｐ15）

「善行の士は裸で戦うのを好む力士です。彼は自分の力の使用を妨げる**つまらぬ装飾物、多くはなんらかの奇形を隠すために発明された装飾物を**、すべて軽蔑します。」（16）

「芸術がわれわれのもったいぶった態度を作り上げ、飾った言葉ではなすことをわれわれの情念に教えるまでは、われわれの習俗は粗野ではありましたが、自然なものでした。」（16）

「**われわれの学問と芸術とが完成に近づくにつれて、われわれの魂は腐敗したのです**。」（19）

「**学問と芸術とが生まれたのはわれわれの悪のせい**であって、---------」（31）

「**取りかえしの付かない時間の浪費**こそ、学問が必然的に社会に与える第一の害です」（33）

「他のもっと大きな悪が、--------**奢侈**で-----。」（35）

「----奢侈の当然の結果である**習俗の堕落**が、今度は**趣味の腐敗**をよびおこすのです。」（39）

「才能の差別と徳の堕落とによって人間の中に導きいれられた**有害な不平等**---------」（45）

「われわれは、物理学者、幾何学者、化学者、天文学者、詩人、音楽家、画家はもっていますが、もはや市民をもっていません。あるは、まだ市民が残っているとしても、みすてられた田園にちらばっていて、貧乏でさげすまれて死んでいきます。これが、われわれにパンを与え、われわれの子どもに乳をあたえてくれる人々がおちいっている状況であり、----。」（46-7）

「おお、徳よ！素朴な魂の崇高な学問よ！おまえを知るには多くの苦労と道具とが必要なのだろうか。お前の原則はすべての人々の心の中に刻み込まれていはしないのか。お前の掟を学ぶには、自分自身の中にかえり、情念を静めて自己の良心の声に耳をかたむけるだけで十分ではないのか。ここにこそ真の哲学がある。」（54）